

## 歌僧・承空の基礎的考察

－『篁物語』書写の歴史的背景－

仁 藤 智 子

【キーワード】 篁物語 (玄観房) 承空 宇都宮氏 歌書の書写  
西山往生院 資経本 承空本・西山本

### はじめに

『篁物語』の展開過程を考えるためには、承空本の位置づけが必須であり、鎌倉後期の歌僧・玄観房承空が『篁物語』を書写した歴史的な背景を明らかにすることが課題となる。承空とはどのような人物なのであろうか。なぜ承空はたくさんの方の歌書を書写したのであろうか。承空の没後、どのようにして彼の大量の歌書が冷泉家時雨亭に所蔵されるようになったのであろうか。小稿では、まず、玄観房承空がいかなる人物であったのを明らかにしたい。次に承空本と呼ばれる一連の歌書群を紹介し、それに基づいて、その書写と伝来の過程についての試論を述べたい。

### 1 下野宇都宮氏と承空

#### (1) 鎌倉期の宇都宮氏の動向と京都との関わり

題知らず

秋来ても訪はれずとてや津の国の生田の社に鹿のなくらむ

承空上人(『新千載集』巻16・雑上)

これが、今日の残っている承空の唯一の和歌である。この一首をもって歌人と断定するには無理があるが、和歌を嗜んでいたことは確かであろう。浄土宗の僧侶である承空がいかなる人物であったか、ということを考える際には、彼の出自となる宇都宮氏の活動と鎌倉期における宇都宮歌壇に言及しないわけにはいかない。そこで、まず鎌倉期の宇都宮氏の動向についてみておきたい。

下野国の宇都宮氏は、摂関家の兼家・兼通流の藤原宗円を祖として、その孫朝綱が宇都宮氏と名乗ることに始まるとされる、東国を代表する有力御家人の一つである<sup>1</sup>。その出自と関東進出については、不明なところが多い<sup>2</sup>。市村氏によれば、

藤姓宇都宮氏が実質的に下野進出をしたのは、中原姓宇都宮氏に遅れて、京で鳥羽・後白河などの院の武者として近侍していた宗綱・朝綱父子が、「宇都宮社務職」を安堵された文治年間以降であったと考えられる<sup>3</sup>。

鎌倉期に活躍した宇都宮頼綱は、朝綱の子成綱（業綱）の子であるが、源頼朝の乳母であった叔母の寒河尼に預けられて、その夫である小山政光の猶子となった。小山朝政とは乳兄弟という関係になる。頼綱の兄弟には、塩谷家に出された塩谷朝業（のちに出家して信生）などがある。

建久5（1194）年6月に、治承寿永の兵乱に際して平氏によって焼き討ちされた東大寺大仏殿の再興事業にあたって、鎌倉殿源頼朝より脇侍像の再建を割り当てられた<sup>4</sup>。その矢先7月に、朝綱は公田横領に問われて、朝綱自身は土佐に、孫の頼綱は豊後、塩谷朝業は周防に配流された<sup>5</sup>。短期間で赦されて帰郷したと考えられるが、元久2（1205）年8月に、頼綱は謀反の嫌疑をかけられる。舅にあたる北条時政と後妻牧の方が共謀して、三代將軍実朝を排して娘婿平賀朝雅を將軍に就けようとした。頼綱は、この牧氏の変に巻き込まれたのである。鎌倉は小山朝政を遣わして、宇都宮氏を討伐させようとしたが、頼綱はすぐに恭順の意を示すために出家して法名を実信房蓮生とし、鎌倉に参向した<sup>6</sup>。小山や塩谷の執り成しもあって、嫌疑は晴れた。出家後は、頻繁に上京し、宗教活動や経済活動などに従事した。承久の乱の際には、蓮生は鎌倉留守居を命ぜられている。嘉禄2（1226）年に、漸く成人した泰綱に家督を譲り、信生とともに在京活動を本格化する。

頼綱は、政治的配慮もあってか、多岐にわたる婚姻関係を築いていた。頼綱自身は、北条時政女や稲毛重成女といった東国の有力御家人との姻戚関係を通じて、鎌倉における盤石の基礎を築いた。継嗣である泰綱には北条朝政女を、小山氏を名乗るようになる宗朝は三浦家村女をと、男子には積極的に東国御家人と姻戚関係を結んだ。

一方で、女子の多くを京都の公家に嫁がせていた。三条実房室や源（中院・三条坊門）通成室や藤原（御子左家・二条）為家室などである。三条実房は、左大臣まで上りつめた有力公卿である<sup>7</sup>が、『千載和歌集』に6首がとられるなど歌人としても一目置かれた存在であった。源通成は、源通親の孫に当たり、父親は通方、母は一条能保女であった。通方の同母姉には、通親の養女となった承明門院在子（後鳥羽天皇妃、土御門天皇の母）がいた。通成自身、大納言から内大臣に上り、娘は西園寺実兼室、三条実重室となり、頼綱女は通頼・通教兄弟を設けた。また、藤原為家は藤原定家の子息である。頼綱と定家の交流は有名であり<sup>8</sup>、為家と宇都宮氏女の所生子は、御子左家流二条家の祖となる為氏や京極家の祖となる為教などがある。頼綱（蓮生）は在京のまま西山で没するが、彼が京都で作り上げた人脈は、その後の宇都宮氏に大きく影響することになる。



頼綱の後を継いだ泰綱は、母の従兄弟にあたる北条泰時から偏諱を賜り、鎌倉幕府の評定衆や下向した宗尊親王の布衣を務めた。皇族将軍である宗尊親王の下で鎌倉歌壇が形成されていったが、その中で泰綱は歌人としても高く評価されていた。頼綱・泰綱の2代は、定家をはじめとする京都の公家歌壇とも頻繁に交流し、一方で宇都宮歌壇と呼ばれるサロンを形成した。大叔父信生も歌人として著名であり<sup>9</sup>、『新和歌集』も編まれた。このような環境が、承空にも少なからず影響を与えたと考えられる。泰綱は出家した後、順蓮と称する。これは、父頼綱が蓮生と法名を名乗ったことによる。蓮生—順蓮—蓮喩(景綱)—蓮昇(貞綱)と、宇都宮氏の家督継承者は「蓮」を法名の通字としていた。

その子景綱も、父の後を継いで宗尊親王の近習を務める傍ら、幕府でも引付衆、評定衆を務めた。安達義景の女と婚姻関係を結んでいたため、弘安8(1285)年の霜月騒動で義弟安達泰盛が攻め滅ぼされると、失脚を余儀なくされた。永仁元(1293)年の平禅門の乱後に、幕府に復帰している<sup>10</sup>。彼の活動基盤は、主として鎌倉と領地下野国を中心とする東国であったが、その子貞綱が六波羅に出仕するなど、京都とのかかわりが断たれたわけではなかった。それより遡る弘安元(1278)年に、従兄弟にあたる藤原為氏と京都西山・善峯寺に参詣した際に、為氏が詠んだ歌が残る。

弘安元年三月、藤原景綱ともなひて、西山の善峰というふ寺に詣でて、  
外祖父蓮生法師の旧跡の花の散り侍りけるを見て、人々三首歌詠み侍りける  
に、

前大納言為氏

訪ね来て昔をとへば山里の花のしずくも涙なりけり

(『新千載集』 卷19 哀傷、2181)

西山善峯寺の近隣には、祖父の蓮生(頼綱)が結んだ庵があったところとされるが、承空の居住することになる往生院があり、宇都宮氏にとってゆかりの深い地である。景綱自身は、父祖のように頻繁に在京活動をしなかったようである<sup>11</sup>が、藤原為家・為氏一家との交流は続いていた。この景綱を兄とするのが、承空である。承空にとっても、藤原為氏は従兄弟にあたっていたことを留意しておきたい。

以上、述べてきた関係を、【図1】として承空を中心にまとめてみた。承空に関する専論は、福田秀一「二人の歌僧—承空と源承—」<sup>12</sup>だけである。しかし、承空の存在にいち早く気づいたのは、桃裕行「極楽寺多宝塔供養願文と極楽寺版瑜伽戒本(下)」<sup>13</sup>である。それらに導かれながら、節をかえて僧侶としての承空についてみていきたい。

## (2) 西山往生院と承空

承空は、「西山往生院五代長老」という肩書を冠する。先述したように、下野国の御家人宇都宮氏の出身で、頼綱の孫、泰綱の子、景綱の兄弟である。出家した年月は不明であるが、桃裕行によれば、父泰綱の法要を鎌倉極楽寺で執り行っている<sup>14</sup>ので、それ以前に剃髪し、永仁年間（1293-1298）までに上京したと考えられる。

承空が師事したのは、証空とその弟子栖空という浄土宗の僧侶である。浄土宗は、法然房源空を開祖とする。源空の弟子は、大きく三派にわかれた。弁長をはじめとする浄土宗鎮西派、親鸞を開祖とする浄土真宗、そして善慧房証空による西山派<sup>15</sup>である。西山は、かつて天台宗僧観性が、天台の既成教学からの距離を置くために庵（往生院）を設けたところである。その弟子である天台座主慈円は、師の観性を庇護した関係で、観性が没する際に、往生院を託されている<sup>16</sup>。その後、建暦2（1212）年以降、証空は往生院留守聖人であった聖弘から買い取ったり、譲り受けたりした善峯寺の北尾往生院松尾坊を拠点に、活動を開始した<sup>17</sup>。後年には富坂庄も買い取った<sup>18</sup>。このようにして証空は、天台宗の善峯寺の傍らの往生院で、のちに浄土宗西山派と呼ばれる一派を形成する。この往生院を経済的に支える一翼を担ったのは、源空と証空の直弟子の一人であった蓮生（宇都宮頼綱）と信生（塩谷朝業）ら、東国御家人宇都宮氏であった<sup>19</sup>。

この西山派は、証空の没後、以下のように大きく四つの宗派に分かれて、展開する。

- ・法興房浄音（西谷派）
- ・立信房円空（深草派）
- ・観鏡房証入（東山派）
- ・道鏡房証慧（嵯峨派）

しかし、それらに属しない僧も多くおり、承空の師事した遊観房栖空もその一人であった<sup>20</sup>。栖空は、そのまま西山往生院に残り、永仁6（1298）年に入滅している。承空は、いつから西山に居住するようになったのであろうか。【表1】にまとめた西山本の書写年代によれば、歌書の書写作業で一番早いものはNo.33『範永朝臣集』の永仁3（1295）年5月19日のものである。承空の自筆署名があるものは、No.18『山田集』（永仁4年7月13日）とNo.41『言葉と歌集下』（永仁4年7月12日）である。これらから、承空は永仁3年遅くとも4年までに、西山往生院に居を構えて歌書の筆写活動を開始したと考えられる。また、冷泉家時雨亭文庫所蔵の承空本歌書群の紙背文書の年代からも、永仁3年には西山に居住していたと確認できる<sup>21</sup>。紙背文書及び歌書の奥書によれば、栖空の最晩年に、承空は西山に居住して、歌書の筆写活動を行っていたことになる。この活動は、承空の晩年の正和2（1313）年12月15日以降まで及んでいる。

栖空の死後、承空は西山五世長老となった。西山往生院に住む僧侶の中には、彼の歌集書写作業を手伝ったものもいたことが、【表1】の歌書群より明らかである。No.48『範家家集』の恵空やNo.47『柿本人麿集』やNo.50『忠見集』の義空のほかにも、右筆による書写であるものも存在する。そうすると、西山における歌書の書写は、承空個人の活動というより、承空を頂点とする西山派の活動という色合いが強い。

だが、承空が亡くなると、往生院主の座をめぐって、弟子の頓達と康空が争うようになった。頓達は承空の直弟子であったが、一方の康空は東山派の仏観の弟子であり、この争いに勝利して往生院主となったのは、示導坊康空であった。そのため、承空の歌書書写活動はもとより、聖教の書写・普及活動も高く評価されなかったらしい<sup>22</sup>。【図2】に以上の浄土宗内における動向と関係をまとめてみた。

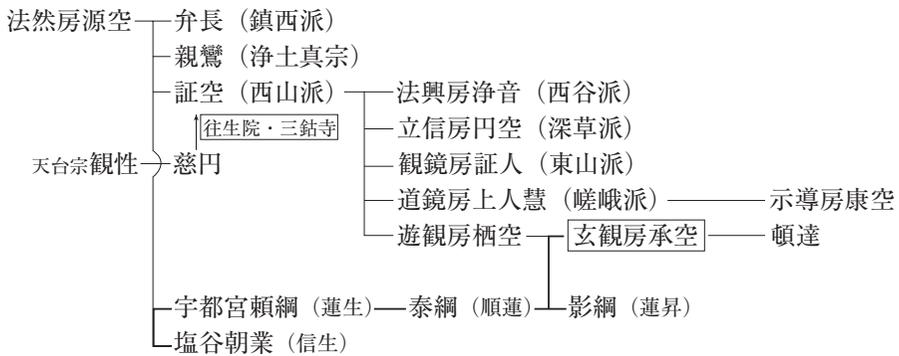


図2 承空を軸とした西山派の成立と展開 (太線は血縁関係)

この代替わりによって、承空らによって書写された西山の歌書類の行方はどうなったのであろうか。そこで、西山本と総称される承空らの書写活動を見ることによって、それらの伝来過程の糸口をみつけていきたい。

## 2 歌書の書写活動

### (1) 西山本

承空らによる西山往生院における書写作業を如実に語るのには、近年相次いで公刊された冷泉家時雨亭に伝来する蔵書の中の、多量の歌書と聖教類である。伝来する歌書は50近くに及ぶ。従来、承空本と称されるのは、狭い意味では昭和62(1987)年に重要文化財に指定された41種43冊を指すが、先述したようにそれ以外にも承空の筆ではないものも散見するので、承空周辺の西山派僧侶の一連の書写作業を総体として捉えなければならないであろう。藤本孝一は、承空が直接書写に関わったとされる「私家集四十三冊」の承空本だけでなく、義空の奥書がある『柿本人麿集』や恵空の奥書がある『範宗歌集』や、承空という奥書のない『曾

祢好忠集』など（これらもすべて、平成 15（2002）年に重要文化財に指定）も含めて、浄土宗西山派の僧侶らによる歌書類を「西山本」と総称すべきであると主張する<sup>23</sup>。この指摘は正鶴をえていよう。つまり、【図 3】に示すように西山本という史料群のなかに、狭い意味での承空本が含有されるということになる。「西山本」の詳細については、【表 1】に整理した。なお、【表 1】は調査途上であり、現時点での試論として提示することをお許し願いたい。

これによると、【表 1】1～40 が承空本のうちの（私家集）で、41 が承空本の（私撰集）、42～43 が承空本の（歌合）となる。44～48 は、承空あるいは西山にゆかりのそれ以外の人物が書写にあたったものと考えられ、これらを総称して「西山本」となる。

承空本の書写された時期は、永仁 3（1295）年から嘉元元（1303）年であり、西山本としては永仁 2（1294）年から正和 2（1313）年となる。承空の没年は、元享 3（1323）年とも元応元（1319）年とも伝わるが、上洛して早い段階で、これらの歌書の書写活動が精力的に行われたことがわかる。



図 3 西山本と承空本の関係

承空の歌書の書写作業において、親本となったのは、藤原資経本であることが明らかにされている<sup>24</sup>。【表 1】を参照していただきたい。『冷泉家時雨亭住叢書』65～68 巻はこの資経本と呼ばれる私家集が収録されているが、西山本のなかの承空本との書写関係は、No. 1・2・9・10・13・14・17・19・21・25・26・27・32・34・35・36・37 であり、西山本全体としては、No. 44・46 が知られる。資経本のほうが西山本より書写年代が早いことや、後述する伝来関係から、資経本を借り受けて西山本のいくつか書写されたことは確かであろう。

その中で、『篁物語』は、4『小野篁集』として歌書群の一つに数えられるが、奥書がなく、書写年代も不明である。さらに、資経本に該当するものが見つかっていない。その書写過程には二つの可能性が考えられる。一つは、資経本から書写されたが、資経本が伝来過程において何らかの理由で失われてしまったということである。もう一つは、『小野篁集』は、別系統から入手して書写したものという可能性である。同じように、資経本が伝わらない歌書類は少なくない。No. 3 の『小野篁集』のほかに、No. 4・5・6・7・8・11・12・15・16・18・20・22・23・24・28・29・30・31・33・38・39・40 が該当する。これは、承空本（私家集）40 作品のうちの 23 作品と半数以上にあたる。後述するように資経本との関連性は、重要な問題と認識しているが、今後の課題としたい。

以上述べたように『小野篁集』だけを見ては、それが書写された理由や伝

冷泉家時雨亭文庫所藏文書						
西山本	承空本	歌書名	筆写年代		奥書	署名
		1 赤人集				
		2 家持卿集	永仁 6 年	1298 年	永仁 6.6.25 室町宿所	承空
		3 小野篁集				
		4 小野小町集	永仁 5 年	1297 年	建長 6.7.20 (九条三位入道本)・ 安元 2.11.8 (顯仁三位自筆本)・ 正応 5.12.9 藤資經・5.3.15 西 山房承空★承空上人寄進之	承空
		5 業平朝臣集	永仁 6 年	1298 年	永仁 6.5.28	
		6 敏行朝臣集				
		7 躬恒集				
		8 忠岑集			★承空上人寄進之	承空上人
		9 是則集			★承空上人寄進之	承空上人
		10 伊勢集	永仁 5 年	1297 年	永仁 5.3.28 西山菊房★承空上 人寄進之	承空上人
		11 貫之集 上			★承空上人寄進之	承空上人
		12 貫之集 中			★承空上人寄進之	承空上人
		13 貫之集 下			★承空上人寄進之	
		14 僧基法師集				
		15 清正集	永仁 6 年	1298 年	永仁 6.6. ? 室町宿所 ★承空上人寄進之	承空・承空 上人
		16 大中臣頼基集				
	承空本 (私家集)	17 安法法師集	永仁 5 年	1297 年	永仁 5.1. 中甸草庵深窓	右筆花押
		18 山田集	永仁 4 年	1296 年	永仁 4.7.13 西山往生院菊坊	承空
		19 藤原元真集	永仁 6 年	1298 年	永仁 6.6.24 室町宿所 ★承空上人寄進之	承空・承空 上人
		20 義孝朝臣集	正安元年	1299 年	正安 1.11.12 西山往生院草庵	承空
		21 為信集				
西山本		22 御形宣旨集	永仁 5	1297 年	永仁 5.3.29 西山菊坊	承空
		23 元輔集			★承空上人寄進之	
		24 鴨女集	永仁 5 年	1297 年	永仁 5.3.18 西山菊房	承空
		25 時明朝臣集				
		26 実方朝臣集				
		27 清少納言集	永仁 5 年	1297 年	永仁 5.2.12 西山房	承空
		28 重之女集	永仁 5 年	1297 年	永仁 5.2.17 西山	承空
		29 道命阿闍梨集	永仁 5 年	1297 年	永仁 5.1.19 西山善峯寺北尾往 生院菊坊松窓	承空
		30 大中臣輔親集				
		31 帥大納言母集	永仁 5 年	1297 年	永仁 5.3.26 西山房	
		32 家經朝臣集	正安元年	1299 年	正安 1.11.12 西山往生院	承空

宮内庁書陵部蔵本							
叢書	形状	資経本との異同		福田説	藤平説	奥書	署名
69 卷 1	横長本	○ (時雨亭叢書 65 卷)					
69・2	横長本	○ (時雨亭叢書 65 卷) 永仁 2 書写	○ (510・18)		6		
69・3	横長本						
71・4	柵形本		○ (510・12)	9	1	永仁 5.3.15 西山★承空 上人寄進之	承空
69・4	横長本						
71・6	柵形本		○ (510・12)	19		★承空上人寄進之	
71・7	柵形本						
69・5	横長本						
69・6	横長本	○ (時雨亭叢書 65 卷)					
69・7	横長本	○ (時雨亭叢書 65 卷) 永仁 1 書写					
69.8	横長本						
	横長本						
	横長本	○ (時雨亭叢書 65 卷) 正応 6 書写					
69・9	横長本	○ (時雨亭叢書 66 卷) 永仁 1 書写					
69・10	横長本						
69・11	横長本						
69・12	横長本	○ (時雨亭叢書 66 卷) 永仁 2 書写					
69・13	横長本		○ (501・181) 桂 2	4		永仁 4.7.13 西山往生院 菊坊	承空
69・14	横長本	○ (時雨亭叢書 66 卷) 永仁 1 書写					
70・20	横長本		○ (150・576)	15		正安 1.11.12 西山往生 院草庵	承空
70・21	横長本	○ (時雨亭叢書 67 卷) 永仁 2 書写			4		
70・22	横長本		○ (501・178) 桂 9	12		永仁 5.3.29 西山菊坊	承空
70・23	横長本		○ (510・12) 桂 1	19		★承空上人寄進之	
71・24	柵形本		○ (501・177)	10		永仁 5.3.18 西山菊房	承空
70・25	横長本	○ (時雨亭叢書 68 卷)					
71・26	柵形本	○ (時雨亭叢書 67 卷) 永仁 2 書写	○ (501・183)		8	永仁 2.5.18 書了	
70・27	横長本	○ (時雨亭叢書 67 卷) 永仁 1 書写	○ (150・547) 桂 9 ■ (150・271)	7	3 ■	永仁 5.2.12 西山房	承空
70・28	横長本		○ (501・146) 桂 9	8	3 ■	永仁 5.2.17 西山	承空
70・29	横長本		○ (501・176) 桂 2	5		永仁 5.1.19 西山善峯寺 北尾往生院菊坊松窓	承空
70・30	横長本						
70・31	横長本		○ (150・574)	11		永仁 5.3.26 西山房	
70・32	横長本	○ (時雨亭叢書 67 卷) 永仁 2 書写					

	33	範永朝臣集	永仁3年	1295年	永仁3.5.19 西山往生院	右筆花押屋々丸
	34	藤三位集	永仁5年	1297年	永仁5.3.29 西山菊坊	承空
	35	京極大殿御集	永仁5年	1297年	永仁5.4.15 西山往生院菊坊教人書写之訖	
	36	顕綱朝臣集				
	37	行尊大僧正集	永仁5年	1297年	建久4.3.10 書写了、弘安7.11.2 校合、永仁5.2.3 西山善峯寺北尾往生院菊坊松窓	承空
	38	基俊朝臣集				
	39	信生法師集				(裏表紙) 承空
	40	城美の前司集				
承空本 (私撰集)	41	言葉と歌集 下	永仁4年	1296年	永仁4.7.12 西山承空・真木野御方法印御坊所持本を筆写	(表紙) 承空
承空本 (歌合)	42	奈良花林院歌合				
	43	歌合			文治2(1185)年	
	44	朝光集(断簡)				
	45	四条宮下野集	正和2年	1313年	治承4.3.15 書之、寛元4.12.7 書写之、正和2.12.15	
	46	曾祢好忠集	永仁4年	1296年	永仁3.6.12 西山善峯北尾菊坊	
	47	柿本人麿集				義空
	48	範宗家集	文永10年	1273年		恵空
	49	猿丸集				
	50	忠見集			★承空上人寄進之	義空
	51	曾丹集				

\*書写時期が特定できないものも、紙背文書から鎌倉後期と位置付けられる

★「承空上人寄進之」(異筆) 文言あり

福田説とは、福田秀一「中世和歌史の研究」(角川書店、1972)における番号

藤平説とは、藤平泉「正応・永仁期の歌書書写活動について」で調査した資経本の番号

70・33	横長本		○ (501・185) 桂3	2		永仁 3.5.19 西山往生院	
70・34	横長本	○ (時雨亭叢書 68 卷) 永仁 1 書写	○ (150・553) 桂9	13		永仁 5.3.29 西山菊坊	承空
70・35	横長本	○ (時雨亭叢書 68 卷)					
70・36	横長本	○ (時雨亭叢書 68 卷)					
71・37	桁形本	○ (時雨亭叢書 68 卷) 永仁 2 書写	○ (150・556) 桂4	6	7	永仁 5.2.3 西山善峯寺 北尾往生院松窓	承空
70・38	横長本						
70・39	横長本		○ (501・170) 桂6	18			承空
70・40	横長本						
7							
49・42			○ (501・18) 桂 14	16		正安 2.4.25 西山往生院 菊坊	承空
49・43			○ (501・20) 桂 14	17		嘉元 1.10.16	
70・付録	横長本	○ (時雨亭叢書 67 卷) 正応 6 書写					
71・無	横長本						
71・無	縦長本	○ (時雨亭叢書 67 卷)					
72・7							
72・8			○書・乙本・桂五	1		文永 10.5.3 善峯北尾往 生院	惠空か
		○ (時雨亭叢書 65 卷)	○ (510.12)			永仁 6.6.8 室町宿所★ 承空上人寄進之	承空
71・無	縦長本		○ (510.12) 桂 1				
			高松宮・谷森蔵本	2		永仁 3.6.12 西山善峯北 尾南坊	

来して来た過程を明らかにすることはできないことは自明である。西山本において、『小野篁集』がどのように位置づけられるのかを解明することが求められる。資経本とは別の手掛かりになるのが、西山本の歌書類の紙背文書である。既に『冷泉家時雨亭蔵書叢書』にはこれらの紙背文書も収録されているが、その内容は書状や消息を中心に多岐にわたる<sup>25</sup>。この表（歌書群）と裏（紙背文書）を一体として解明し理解することが、西山における書写活動の全貌と書写された作品の伝来過程を明らかにする最善の手段であろう。紙背文書には多数の人名が見えており、万葉集を研究した玄覚などもこの活動に係わっていた。この点も、今後の調査に期したい。

## (2) 西山本の伝来過程

『小野篁集』を含む、これら大量の歌書群はどのようにして、今日冷泉家時雨亭に所蔵されるようになったのであろうか。この伝来過程については、さらに検討が必要とされるが、興味深い指摘がある。

藤本氏は、これら西山本は承空が没した鎌倉末期に、二條家に寄進されたと推測している<sup>26</sup>。同様の指摘は、宮内庁書陵部本とそこに見える資経本の分析を行った藤平氏の研究によって示されているところである<sup>27</sup>。卷末奥書に見える「承空上人寄進之」という文言に着目されて導き出したこの指摘は、桃氏が明らかにした「浄土総系図」の書き抜き部分<sup>28</sup>や、先述した承空亡き後の西山往生院の跡目争いを考慮すると蓋然性が高いのではないだろうか。

「承空上人寄進之」という文言が見える西山本は、【表1】によれば、No.4・8・9・10・11・12・13・15・19・23であり、10集にも及んでいる。このうち、No.15『清正集』を見てみると、

永仁六年六月八日於室町宿所書写之 承空

「承空上人寄進之」<sup>(別筆)</sup>

と書かれている。室町宿所とは、京都室町にあった承空ら西山派の拠点のひとつで、No.2『家持卿集』とNo.19『藤原元真集』などにも見えている。京内で歌書を借り受けたり、返却したりする際にもここが使われていたと考えられ、借りた歌書をここで書写したと考えられる。さらに明らかに別筆で「承空上人寄進之」と走り書きされている。これは、書写された歌書が、後年になって何者かの手によって、寄進されたことを明示するものである。誰が、どこに、なぜこの書写本を寄贈したのだろうか。

このことを考えるために、承空本No.4『小野小町集』を見てみよう。承空本の本文の（12オ）4・5行目に、

已上顯家三位本

他家本十八首

とあり、ここまでが「顯家三位本」に、ここから 18 首（実際には 17 首）は「他家本」によっていたことが明記されている。さらに、(13ウ) 4 行目に、

他本 小宰相本也 八首

とみえ、ここから 8 首（実際には 7 首）は「他本（の）小宰相本」によって補われたことが知られる。さらに、奥書に、

建長六年七月廿日重校合于九

条三位入道本了 彼本哥六十

九首云々 顯家三位自筆

本也 安元二年十一月八日云々 …a

正應五年十二月九日令侍中

詹事丞書<sub>成尚</sub>之即之校了

藤資経 …b

永仁五年三月十五日於西山房

書写了

承空 …c

承空上人寄進之 …d

とあり、三箇所<sup>29</sup>の注記・奥書から書写の過程がわかる。

建長 6（1254）年 7 月 20 日に、安元 2（1176）年 11 月 8 日の期日をもつ「顯家三位自筆本」と収録和歌数 69 首である「九条三位入道本」との校合をした（a）。それを元に、正應 5（1292）年 12 月 9 日に、藤原資経が成尚に命じて書写させて校合を終えた。このときに既に「顯家本」「他家本」「小宰相（土御門小宰相・藤原家隆娘）本」によって補われていた（b = 資経本）。これを借用したのが承空で、永仁 5（1297）年 3 月 15 日に転写し終えた（c = 承空本）。これを後日、誰かがどこかに寄進した（d）というのである。現在、この本が冷泉家時雨亭文庫に伝来していることを勘案すると、寄進先は二条家もしくは冷泉家ということになろう。宮内庁書陵部本（510.12）は、最後の c と d の部分があることから、承空本を借用して書写したものであることがわかる。すなわち、

「1176 年の顯家三位自筆本」と「九条三位入道本」を校合：1254 年

- (校合・書写)「資経本 (ひらがな)」: 1292 年
- (書写)「承空本 (カタカナ)」: 1297 年
- (寄進)「藤原二条・京極家もしくは冷泉家」
- (書写)「書陵部蔵本 (ひらがな)」: 江戸初期

ということになる (このうち、太字が現存する)。

さらに注目すべき点は、鎌倉後期に「漢字混じりカタカナ」で書写された承空本が、江戸初期に書陵部本に転写される段階で「漢字混じりひらがな」に書き換えられていることである。『小野小町集』には、神宮文庫本とこれと別系統で書陵部蔵本系統の歌仙歌集本があるが、承空本と書陵部蔵本との関係が明らかになる一例である。

この『小野小町集』の書陵部蔵の資経本に関しては、先述した福田氏のほかに藤平氏の研究がある<sup>30</sup>が、藤平氏の研究は時雨亭蔵本の承空本と資経本の影印本が公開される前のもので、時雨亭蔵本については未調査である。【表 1】を見てみるとわかるように、時雨亭蔵本の承空本の『小野小町集』は現存しているが、時雨亭蔵本の資経本『小野小町集』は伝来していないことも留意すべきである。

また、No. 49 の『猿丸集』は西山本には存在しない。しかし、資経本にあることと、宮内庁書陵部蔵本に「永仁六年六月八日室町宿所」「承空上人寄進之」とあることから、永仁六年に京都・室町宿所で書写された一連の本 (No. 2・15・19) の一つであり、後年に承空本が一括して寄進されるときには含まれており、書陵部蔵本が書写された段階では存在したものの、今日伝来していないと推測される。

以上の考察から、現時点で判明している書写と伝来過程をまとめると【図 4】になる。

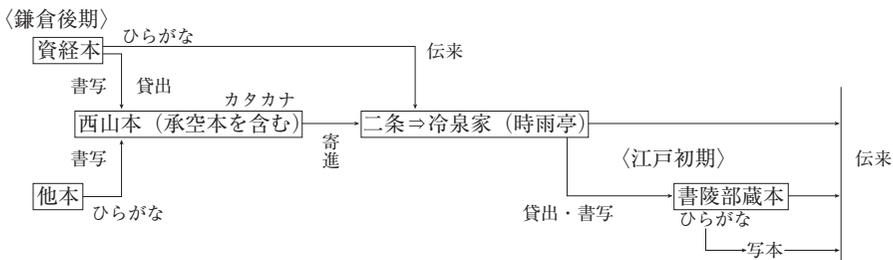


図 4 歌書の書写・伝来過程

従来の研究では、鎌倉後期に書写された資経本が、江戸初期に貸し出されて、書写されたものが書陵部蔵本であるということは明らかになっていた。冷泉家時雨亭蔵本の公開により、小稿で考察したように、資経本と西山本は永仁年間を中心とした鎌倉後期の近い時期に書写されており、西山本は資経本を書写したのが間違いないこと。さらに、「漢字混じりひらがな」で記されていた資経本などが、

西山本として書写される際に「漢字混じりカタカナ」で記されたこと。この両者が、経緯を経て時雨亭に伝来し、江戸初期に書写される際に西山本を親本としたものは、「漢字混じりひらがな」に再度置き換えられたことが判明した。

資経本と、承空本を含む西山本と、両者を親本とする宮内庁書陵部蔵本の関係は、注視すべきことであり、今後三者の関係については詳細な調査を行っていききたい。

## 結びにかえて

小稿の目的は、鎌倉後期の歌僧・玄観房承空が『篁物語』を書写した歴史的な背景を明らかにすることである。承空とは、東国有力御家人の宇都宮氏の出自を持つ浄土宗西山派五代長老であった。宇都宮氏は、祖父頼綱・大叔父塩谷朝業が源空や証空に深く帰依しており、彼らの活動のパトロンの一であったこと、その縁で承空は証空に弟子入りしたと考えられる。一方で、頼綱や朝業は、藤原定家とも親交が深く、宇都宮歌壇と称されるような東国サロンの担い手であったことや、婚姻関係を通じて二条為家一族とは交流が継続的にあったことも明らかであり、宇都宮歌壇と京都歌壇の交流という、承空による歌書の書写活動の背景がうかがえる。

承空本の一部は、資経本を借用・書写して作られたことが従来から指摘されていたが、本考察によって両者の関係がより明らかになった。「承空上人寄進之」という別筆の文言より、後日、おそらく承空氏没後、跡目争いに敗れた愛弟子頓達らによって往生院からも持ち出された歌書類（承空本を含む西山本）が、まとめて縁続きにあった二条（京極）家に寄進されて、やがて冷泉家時雨亭に伝来されるようになった経緯が推測できる。江戸初期に、冷泉家が所蔵していた西山本や資経本を借り受けて書写してできたのが宮内庁書陵部蔵本であり、親本が西山本の歌集については「漢字混じりカタカナ」から「漢字交じりひらがな」への転換・書写が行われたことなど書写と伝来過程の一部も明らかになった。

勅撰集に数多く入集する西山派の僧侶たちの文芸活動と歌書の書写がどのように結びつくのか、紙背文書を接合して読解することによって、西山本における歌書類の関係性がどのように解明できるのか、『小野小町集』からうかがえた資経本と、承空本を含む西山本と、宮内庁書陵部蔵本あるいはそれ以外の歌書の書写本がどのような関係にあるのか、漸く探求の入り口にたどり着いた。課題は山積しているが、与えられた紙幅も尽きたので、ここで擱筆することをお許し願いたい。

〈註〉

- 1 『宇都宮系図』（栃木県宇都宮市上野記念館所蔵本、京都府京都市三鈴寺所蔵室町写本および江戸写本）。
- 2 野口実「下野宇都宮氏の成立とその平家政権下における存在形態」（京都女子大学宗教文化研究科『研究紀要』26号、2013年）では、園城寺僧侶宗円が下向したとする。しかし、市村高男「中世宇都宮氏の成立と展開」（『中世宇都宮氏の世界』所収、彩流社、2013年）では、中原姓宇都宮氏と藤姓宇都宮氏の下野進出と婚姻関係による紐帯を重視する。
- 3 市村高男前掲注(2)論文。
- 4 永村眞「中世宇都宮氏とその信仰」（栃木県立博物館特別記念企画展図録『中世宇都宮氏—頼朝・尊氏・秀吉を支えた名族—』所収、2017年）。
- 5 『吾妻鏡』建久五年五月二十日・七月二十八日条。『玉葉』建久五年三月一日・七月十六・十七・十九日条。下野国司藤原行房から公領の押領を訴えられた。
- 6 『吾妻鏡』元久元年八月七日・十一・十六・十七日条。
- 7 『尊卑分脈』一卷112・132頁。
- 8 『明月記』嘉禎元年四月十三日、二十三日、五月一日、二十七日条には、頼綱が定家・為家父子などを招待して連歌を催し、それに対して、定家は嵯峨院中の障子に和歌を書き記したものを送っている。宇都宮氏の京都での活動については、山本隆志「関東武士の都・鄙活動—宇都宮頼綱—」（『東国における武士勢力の成立と発展』所収、思文閣出版、2012年、初出2006年）、木村真理子「鎌倉時代京都周辺における宇都宮氏の活動と人的つながり」（『栃木県立文書館研究紀要』21号、2017年）等、市村前掲注(2)論文に詳しい。
- 9 塩谷朝業は、三代将軍実朝とも歌のやり取りをするなど親密であったが、建保7（1219）年に実朝暗殺事件が起きると、出家して京に居所を移した。『信生法師日記』には鎌倉との往来や善光寺参りなどの記事が見える。彼の歌集『信生法師集』は承空本（【表1】No.39）にも所収されているが、前半（1オ1行目～9オ5行目）は『信生法師日記』の採録である。後半（9オ6行目～21ウ）は歌集になっている。田中登「解題」（『冷泉家時雨亭叢書』70巻、2006年）では、承空本以外に知られていた書陵部本（501・170）との識語や内容の一致から、承空本が書陵部本の親本であるとしている。
- 10 福島金治『安達泰盛と鎌倉幕府—霜月騒動とその周辺』（有隣堂、2006年）など。
- 11 市村前掲注(8)論文。
- 12 福田秀一『中世和歌史の研究』（角川書店、1972年。初出は1963年）。
- 13 『武家家訓の研究 桃裕行著作集3』所収（思文閣出版、1988年、初出は1960年）。
- 14 桃裕行前掲注(13)論文。文永10（1273）年猛夏（5月8日）に相州極楽寺少沙彌として父泰綱の十三回忌の法要を行っている。上京したのは、それ以降と考えられる。

- 15 菊池勇次郎「西山義の成立—西山往生院の展開」（『源空とその門下』所収、宝蔵院、1985年、初出1955年）、吉田清「善慧房証空」（『源空教団成立史の研究』所収、名著出版、1992年）など。
- 16 大山喬平編著『京都大学文学部 博物館の古文書9 浄土宗西山派と三鈷寺文書』（思文閣出版、1992年）解説21～22頁。
- 17 大山前掲注(16) 編著書24～25頁。
- 18 大山前掲注(16) 編著書。『三鈷寺文書』から、富坂庄の伝領関係は、橘則光一良真一（4代略）慈円—観性—守円—成源—証空であったと考えられる。
- 19 山本前掲注(8) 論文。
- 20 吉田前掲注(15) 論文。
- 21 田中倫子「各本紙背文書解題 承空本」（『冷泉家時雨亭叢書』82巻、2007年）。紙背文書の検討は今後の課題としたい。
- 22 福田前掲注(12) 論文。
- 23 藤本孝一「冷泉家時雨亭文庫蔵本の書誌学 その十六 伝来の歴史(13)」（『冷泉家時雨亭叢書』月報、2006年）、同「冷泉家時雨亭文庫蔵本の書誌学 その二十 伝来の歴史(十七)」（同月報、2007年）、および田中倫子前掲注(21) 解題。
- 24 藤本前掲注(23)。藤平泉「正応・永仁期の歌書書写活動について—善峯寺往生院における文学活動—」（『古典論叢』17号、1987年）。藤平氏は時雨亭文庫所蔵承空本を見ている段階での研究成果であるが、資経本における『小野小町集』の奥書に着目している。藤原資経が甘露寺資経ではないことは確かである。
- 25 田中倫子前掲注(21) 解題。田中倫子氏によれば、紙背文書の多数は書状・消息で、それ以外は連歌や和歌の懐紙、所領関係の言上状、仏事関係の注文などである。
- 26 藤本前掲注(23)。藤本孝一「藤原資経本『千穎集』の書誌的研究—伝本を中心として—」（『古代中世文学論考 第3集』所収、新典社、1999年）では、『千穎集』を素材に、書写伝来過程を述べる。それによれば、藤原資経は二条家の家司周辺の人物であろうこと、二条家に伝わった資経本と西山本が、室町期の二条家断絶と養子に入った冷泉為邦によって、冷泉家の二条家本が持ち込まれたことなど小稿とも係わる論点が呈示されている。
- 27 藤平前掲注(24) 論文。
- 28 桃前掲注(13) 論文。272頁。
- 29 藤田洋治「解題 小野小町集」（『時雨亭叢書』71巻、2007年）。
- 30 福田前掲注(12) 論文。